



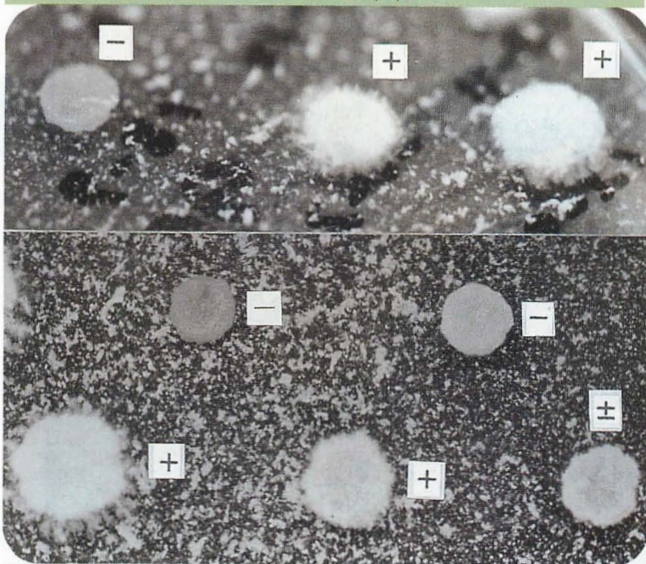
①トルコギキョウ(品種:あずまの紫) ②ウイルスによる花卉のモザイク症状 ③菌核病(*Sclerotinia sclerotiorum*)による立枯れ ④茎腐病(*Fusarium roseum*)の発生圃場 ⑤茎腐病(左)と灰色かび病(右)による病徴のちがい ⑥根腐病(*Pythium spinosum*) (仮称)の発生状況 ⑦根腐病(仮称)の根の病徴 ⑧炭そ病(*Colletotrichum acutatum*) (仮称)の病徴 ⑨斑点病(*Alternaria* sp.) (仮称)の病斑 ⑩スリップスによる花卉の被害 ⑪ホコリダニの一種による被害状況

(関連記事44ページに、写真提供:吉松英明氏)

植物病原菌の薬剤感受性検定マニュアル(3)

—イネばか苗病菌—

イネ褐条病の発生生態



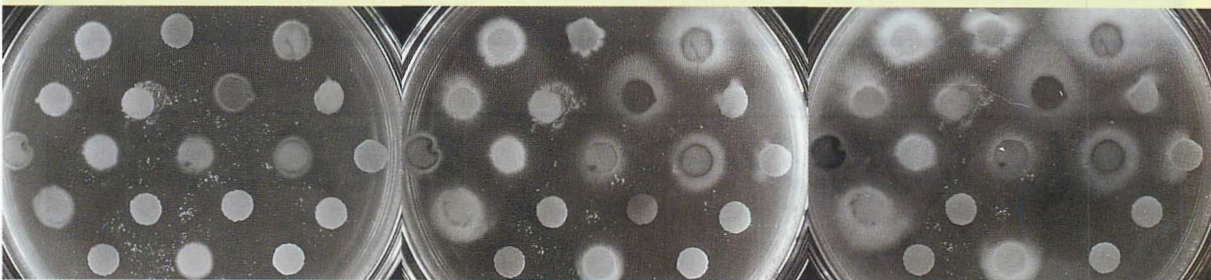
検定培地における菌糸の発育状態と判定基準

α: 培地の表面斜め上からみた図 β: 培地の表面真上から見た図
+: 発育が旺盛 ±: 極めてわずかに発育が認められる -: 全く発育が認められない

① 幼苗期の病徴

② 幼穂形成期の病徴(冠水後に発生した株腐症状)

門田育生氏原図
(本文20ページ参照)



(2日培養, 10 µg/ml)

(5日培養, 10 µg/ml)

(8日培養, 10 µg/ml)

培養日数と菌糸の発育程度(ベノミル10 µg/ml 添加培地上)

培養2日では菌株による菌糸の発育程度は明らかではないが、5日では+と-の判定は容易となる。さらに、8日ではその差は大きくなるが、5日と結果は変わらない。



(100 µg/ml, 2日培養)

(10 µg/ml, 2日培養)

(2.5 µg/ml, 2日培養)

検定濃度と菌糸の発育程度(培養2日)

菌株による菌糸の発育の差は100 µg/mlではほとんど認められないが、10 µg/ml 及び 2.5 µg/ml では大きく、明瞭である。

入江和己氏原図(本文34ページ参照)